

『2010年夏の記憶』

《谷川賢作ピアノ・ソロ》+《独歩プロデュース》+《アニャンゴ ケニアでつかんだ夢》

September 2010

暑い夏に印象に残った爽やかな舞台。三つのレポート！

《谷川賢作ピアノ・ソロ》 at 渋谷クラシックス 8月26日

谷川さんのソロ・コンサートは初めてなので、大変楽しみに懐かしの小劇場ジャンジャンのあった山手教会の地下へ急いだ。倉庫のような何もない空間にグランドピアノが一台。曲目はオリジナルからジョン・ケージ？チック・コリアまで変幻自在。堰を切ったように弾けるタニケンワールド健在なり！

MCも日常に潜む体験的面白話炸裂。小嘶く真夏の大阪・恐怖のディナーショーは仕事柄「もし現場にいたら・・・。」と笑劇的恐怖を味わった。“Let it be”をたっぷり聴かせてのエンディングも清々しい。

数々の映画音楽賞を受賞、作曲家として著名な谷川さん、ジャズピアニストとしてモット注目されるべき人だなーと感じ入った。

来年は小室等さま「親子デュオ」と「パリヤーソ」のコンサートを千葉県柏市の音楽ホールで企画している。個性溢れたデュオのコラボレーションとても楽しみとなった。

※[パリヤーソ](#)

《独歩プロデュース公演＝父と暮らせば》at 中野・劇場MOMO 8月7日

奇しくも今年4月に急逝された劇作家：井上ひさし氏の作品。

「こまつ座」初演以来、映画化もされた佳作。物語は原爆投下後の広島市が舞台、登場人物は父と娘の二人芝居。広島・長崎原爆記念日に合わせての上演に意気込みが感じられる。ヒロシマの青空に放たれた一発の核兵器が人類のたどり着いた想像を越えた悪夢であり未来への不条理な試練となったこと、その計り知れない威力と子々孫々に連なる苦しみのあり様が人間性と対極のものであることを、平凡にして実直なる庶民の営みの中に浮かび上がらせたことで、実在感あるドラマとして描かれていました。

なによりも出演のお二人が作品のもつ情念を見事に演じきって爽快ですらあり、カーテンコールでは気分はスタンディングオベーション。

スタッフワークも良く舞台美術や小道具も戦後間もない生活を現出させ、演出の伊藤氏も自らのヒロシマでの体験と重ねあわせた真摯な舞台作りで本質を捉えた。

7年間続いた「独歩プロデュース」はこれをもって最終章・さよなら公演。

主宰の麦人氏は個人として舞台企画を模索するとのこと、いつか仕事をご一緒出来る機会を願って劇場を後にした。

※作 井上ひさし 演出＝麦人、伊藤勝昭 出演＝麦人&安藤みどり(俳優座)

※[麦人 official web site](#)

《アニャンゴ ケニアでつかんだ夢》 at 朝日カルチャーセンター横浜 7月10日

アフリカ・ケニアに単身渡り、弟子入り“世界初の女性ニャティティ奏者”と認められ、
ニューズウィーク誌「世界が尊敬する日本人 100 人」にも選ばれたアニャンゴこと向山恵
理子さんのレクチャーコンサート。

二年ほど前に彼女の載った記事 {ケニアの伝統弦楽器を演奏する日本人} を見て以来、興
味を持ち、*著書も通読、横浜の会場へでかけた。

電気も水道もないケニア奥地での音楽修業、人々との触れ合い、現地でのコンサートの模
様などを直向きに話す姿に好感を覚えた。暫くして演奏が始まる。まずは楽器<ニャティ
ティ>に注目。彼女が演奏に合わせて歌いはじめた時に「そうだアニャンゴさんは歌手で
もあったのだ」と気づいた。声がストレートに伝わった瞬間に楽器奏者のイメージから
“Anyango”という特異なアーティストの存在を感じてしまった。歌い演奏し語りかけ体中
をフル稼働して表現するディーバが彼女の姿だった。

後日、フジロック・フェス出演前の忙しい時にお会いする機会を得、音楽に対する思いな
どを聞くことができたが、率直にして明確な一途な夢を語る姿に魅了された。

アフリカ音楽を基調にしたワールドワイドなミュージシャンが現れたことに拍手を送りた
い。

*夢をつかむ法則-角川学芸出版-

※ニャティティ=ケニア・ルオー族の8弦の伝統弦楽器。演奏は足首、親指に付けた金属でリズム
を刻む、弦楽器、打楽器、ボーカルの三役をこなす。

[アニャンゴ official web site](#)

『アニャンゴ with ニャティティ・ワレンボショー』を